

Title	古代中世日本における国際認識
Author(s)	榊原, 小葉子
Citation	大阪大学, 2000, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58742
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	榊原 小葉子
本籍（国籍）	
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	甲第 3 号
学位授与年月日	平成12年3月27日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 課程博士
研究科及び専攻	言語社会研究科言語社会専攻
学位論文題目	古代中世日本における国際認識
論文審査委員	主査 教授 武田 佐知子 副査 助教授 米井 力也 副査 助教授 平田 由美 副査 教授 西村 成雄 副査 教授 尾上 新太郎

論文の内容要旨

本論文の目的は、聖徳太子信仰をとおして、古代から中世にかけての対外意識の構造的特質を明らかにし、あわせてそのことを通じて、いくつかの先行研究で言われているような太子信仰の政治的特質——すなわちそれが前近代における「ナショナリズム」の所産であるという論点を深めることにある。

このような問題意識から、各章では、8世紀以降の日本の仏教的世界観に現れる朝鮮観の変遷に注目しつつ、それが各時代ごとの太子信仰とどのように関わり合ってきたのかについて考察をすすめた。前近代の朝鮮半島に対しては、実際の半島内部の状況に関わらず、三韓（百済・高句麗・新羅）という空間認識がみられる。本論文では、三韓のなかでも特に、7世紀半ばに滅亡していながら、観念上は朝鮮半島の一部であり続けた「百済」が、古代から中世にかけての聖徳太子信仰の展開のなかで、常にある一定の位置を占めていることに着目した。まず第1章において、序論として中世期の太子信仰上のある言説の発生と展開の過程を検証し、問題の所在を明らかにした。すなわち本章では、寺院間の言説闘争のなかで太子と「百済」の関係が深められ、太子は日本への仏教伝来の主体・百済聖明王の生まれ変わりであるとまで説かれた13世紀前半の太子信仰をとりあげた。ここに現れる「百済」イメージは、小帝国観に基づいて朝鮮諸国を「蕃国」すなわち服属国とみなすという従来型の朝鮮観にはけっして収まりきらないものであった。しかし「百済」は、「蕃国」であると同時に日本仏教にとっての源泉をも意味し、その文脈においては優越性の表象でもある。つまり、いわゆる「百済」観とは、たんなる蕃国観のみならず、仏教的優越性の要素をも含みこんで成り立っていたといえる。本章でみてきたような言説の展開過程は、従来のような単なる「日本仏教の源泉」としての「百済」に対する観念に変容をもたらし、「蕃国としての百済」という要素をも含めた、全体としての「百済」観の変容へとつ

ながっていく可能性を示した。

第2章および第3章では、こうした太子信仰における「百済」の特殊性が生まれた背景について考察した。太子信仰が古代的ナショナリズムの所産であるという観点から、律令国家体制下での仏教の定着と興隆の過程で、国家意識がどのように形成され、また、それが太子信仰の発展にどのように寄与したのかについての検証を行った。その結果、そうした太子信仰における「百済」の意義は、9世紀初めに成立した仏教説話集『日本霊異記』に規定されることが明らかになった。

『霊異記』には数多くの「諸蕃」系氏族、渡来系氏族の人々が登場するが、その殆どが、実は百済系の氏族出身者である。そして、行基や道照に代表されるように、彼らはいずれも仏教的に卓越した存在として描かれているのである。同書において、百済系氏族だけが特別な位置づけで描かれているのは、上巻序文冒頭でも明言されているように、日本に仏教を伝えたのが百済であったから、あるいは、百済が滅びる前には日本と友好関係にあったから、といった理由も考えられよう。しかしそれ以上に、百済系氏族を「自土」内部に文化的・仏教的優越者として包摂することによって、何らかの特別な効果が期待されていたことが考えられるのである。『霊異記』の編纂時期と重なる桓武朝は、百済王氏が天皇の外戚と称されたり、大量の官人登用がなされた時期でもある。桓武天皇は、母親高野新笠が百済系の和氏の出身であり、百済系氏族との関係は深いが、注目すべきは、桓武天皇の実際の外戚が和史氏であったにもかかわらず、百済王氏を「朕の外戚」と呼んだことである。諸蕃系氏族への賤視が一般的だった当時、敢えて百済王氏を外戚とすることには重大な意味があり、百済系の血への傾斜の強さを物語っている。このような百済王氏重視の傾向は、百済王氏が日本古代国家にとって「百済王権」を象徴する存在であったことと、桓武朝における時代的要請がリンクした結果——つまり、桓武朝における百済王氏の活躍は、中華帝国を志向していた桓武朝の「国際化」に淵源を持つものであった。こうした百済王氏の台頭にもともなう百済系氏族の活躍ぶりが『霊異記』に反映されていると考えられ、同書での「百済」の位置づけられかたが日本仏教界全体に波及していったといえるだろう。

そして第4章では、まず10世紀の『聖徳太子伝暦』において、やはり「百済」は極めて重要な位置づけに置かれていることを明らかにした。太子信仰にとって、『伝暦』の成立は一つの大きな画期と考えられている。すなわち『伝暦』の内容は、後世の太子伝の基礎となるものであり、『伝暦』の成立をもって太子信仰の確立とみなされている。本書にみられる太子信仰の大きな特徴として挙げられるのが、太子と百済人との密接な結びつきなのである。すなわち、ここ描かれる太子は、常に百済人との関係が契機となってその聖性が示されている。そうした太子と「百済」との関係の強調は、太子信仰を単に宗教的次

元において基礎づけただけでなく、同時にその過程において、舶載の思想である仏教を日本独自の国家思想として転成せしめたのである。そして、「百濟」は文化的次元における朝鮮半島の優越性と、そこから来る憧憬を一身に吸収した観念上の存在となったのである。太子が、その死後聖人化され、信仰の対象となったように、太子信仰の発展の過程においては、「百濟」の存在もまた、亡びた国であるがゆえにそのイメージは増幅され、やがて仏教的桃源郷としての記号となったともいえる。そして、こうした『伝暦』および太子信仰全体における「百濟」の意義は、これまでにみてきた『靈異記』の百濟観に規定されていたと考えられるのである。聖徳太子は、皇太子として、また摂政として、推古朝の内政・外交・文化諸方面において力をふるった人物であった。この太子の偉大さを強調するあまり、後世、太子を極端なまでに超人化して描く傾向が強くなる。中国陳朝の高僧で天台宗の第二祖である恵思の生まれ変わりであったとされたり、幼少の頃より人々に仏教を説き、未来をも予言したとされるなど、さまざまな神秘的な事績が語られた。こうした荒唐無稽ともとれる奇瑞譚や転生説は、時代が下るにつれてその種類も増し、内容も豊かになっていく。これは、説話の発展の一般的な傾向であるともいえるが、その展開のあり方は、時代ごとの要請に応えるものであった。古代から中世にかけての太子伝の展開も、時代が求めた太子像の集積の過程であった。やがてそうした太子伝が、平安中期の『聖徳太子伝暦』で集大成としてまとめられ、本書の成立を以て太子信仰の確立とみなされたのである。

仏教的世界観に基づくことによって〈中国からの自立〉を模索し、日本においてようやく国家意識が確立したのが9世紀であった。それゆえ、この時期の日本民族にとっては、自らの政治的・思想的源泉としての中国の存在をもっとも強く意識させられた時期でもあった。この時期の太子信仰にも、中国への強烈なまでの憧憬と対抗意識が表裏一体となって立ち現れている。言い換えれば、国家仏教のもとに組織された律令体制の独自性を、太子を媒介として強調するも、太子自身の仏教的優越性は結局中国仏教に裏打ちされる形でしか保障されえなかったのである。まさに日本にとっては、中国を頂点とする東アジア世界のなかで帝国の構造が実体を失い、観念的な次元でも帝国秩序の維持が危ぶまれた頃であった。このような時期に成立したのが『靈異記』であった。これと前後して成立した『新撰姓氏録』は、現実の東アジア世界において支配される諸蕃を失った段階で、諸蕃系諸民族集団の日本国内での包摂を明示することにより帝国の構造を維持・再確認する機能を担っていたが、『靈異記』において文化的に優越した民族集団・百濟系氏族が「自土」内で日本仏教を支える重要な存在として描かれていたことは、同書が『新撰姓氏録』と同様の機能を果たしていたことを示している。『靈異記』下巻第38話までが編まれた桓武朝期に、先進技術・文化を武器に日本国内で多大な影響力を誇った百濟系氏族も、天皇の外戚

と称され、官人として登用されることによって、あたかも律令制下では「日本之神胤」と対等な立場に置かれているかのようにみえて、実は同時に政治的従属の対象である朝鮮半島の象徴でもあった。そうすると、百濟人僧侶あるいは行基や道照などの百濟系氏族出身の僧侶が高く評価されて描かれている『靈異記』は、一見すると『新撰姓氏録』とは異なる方向性を有しているかのようにみえる。しかし、『新撰姓氏録』成立の直後に追加された下巻第39話では、草木の一本にいたるまで、日本の国内にあるものはすべて天皇に帰属すると主張されている。すなわちこのような説話が追補されたことから、『靈異記』が、文化的に優越した民族集団・百濟系氏族の自土への包摂を強調することで、実際の東アジア国際関係上は存在しない、日本を頂点とした帝国の秩序構造を、観念的次元において実現することを目的としていることが明らかなのである。このことは、とりもなおさず、〈中国からの自立〉という6世紀以来の日本にとっての課題を克服するための活路が「百濟」という観念上の存在に見出されたことを表す。すなわち、『靈異記』において、「百濟」という文化的・仏教的に優越した存在を政治的次元では「諸蕃」として従属させることによって、日本と中国文化・中国仏教との切り離しが仕組まれ、日本は文化的（仏教的）・政治的両側面における対等国として、中国からの独立を目指したのである。そうした自土意識を契機とした自立への試みの集大成が、10世紀の『伝暦』の成立であり、「古代的ナショナリズム」としての太子信仰の確立なのであった。

論文審査の結果の要旨

本博士論文の目的は、聖徳太子信仰をとおして、古代から中世にかけての対外意識の構造的特質を明らかにし、あわせてそのことを通じて、いくつかの先行研究で言われているような太子信仰の政治的特質—すなわちそれが前近代における「ナショナリズム」の所産であるという論点を深めることにある。

このような問題意識から、筆者は、8世紀以降の日本の仏教的世界観に現れる朝鮮観の変遷に注目しつつ、それが各時代ごとの太子信仰とどのように関わり合ってきたのかについて考察をすすめる。前近代の朝鮮半島に対しては、実際の半島内部の状況に関わらず、三韓（百濟・高句麗・新羅）という空間認識がみられる。本論文では、三韓のなかでも特に、7世紀半ばに滅亡していながら、観念上は朝鮮半島の一部であり続けた「百濟」が、古代から中世にかけての聖徳太子信仰の展開のなかで、常に一定の位置を占めていることに着目してきた。まず第1章において、序論として中世期の太子信仰上のある言説の発生と展開の過程を検証し、問題の所在を明らかにした。すなわち本章では、寺院間の言説闘争のなかで太子と「百濟」の関係が深められ、太子は日本への仏教伝来の主体・百濟聖明王の生まれ変わりであるとまで説かれた13世紀前半の太子信仰をとりあげた。ここに現れる「百濟」イメージは、小帝国観に基づいて朝鮮諸国を「蕃国」すなわち服属国とみなすという従来型の朝鮮観にはけっして収まりきらないものであった。しかし「百濟」は、「蕃国」であると同時に日本仏教にとっての源泉をも意味し、その文脈においては優越性の表象でもある。つまり、いわゆる「百濟」観とは、たんなる蕃国観のみならず、仏

教的優越性の要素をも含みこんで成り立っていたといえる。本章でみてきたような言説の展開過程は、従来のような単なる「日本仏教の源泉」としての「百濟」に対する觀念に変容をもたらし、「蕃国としての百濟」という要素をも含めた、全体としての「百濟」觀の形成へとつながっていく可能性を示した。

第2章および第3章では、こうした太子信仰における「百濟」の特殊性が生まれた背景について考察した。太子信仰が古代的ナショナリズムの所産であるという観点から、律令国家体制下での仏教の定着と興隆の過程で、国家意識がどのように形成され、また、それが太子信仰の発展にどのように寄与したのかについての検証を行った。その結果、そうした太子信仰における「百濟」の意義は、9世紀初めに成立した仏教説話集『日本靈異記』に規定されることが明らかになった。

『靈異記』には数多くの「諸蕃」系氏族、渡来系氏族の人々が登場するが、その殆どが、実は百濟系の氏族出身者である。そして、行基や道照に代表されるように、彼らはいずれも仏教的に卓越した存在として描かれているのである。同書において、百濟系氏族だけが特別な位置づけで描かれているのは、上巻序文冒頭でも明言されているように、日本に仏教を伝えたのが百濟であったから、あるいは、百濟が滅びる前には日本と友好関係にあったから、といった理由も考えられよう。しかしそれ以上に、百濟系氏族を「自土」内部に文化的・仏教的優越者として包摂することによって、何らかの特別な効果が期待されていたことが考えられるのである。『靈異記』の編纂時期と重なる桓武朝は、百濟王氏が天皇の外戚と称されたり、大量の官人登用がなされた時期でもある。桓武天皇は、母親高野新笠が百濟系の和氏の出身であり、百濟系氏族との関係は深いが、注目すべきは、桓武天皇の実際の外戚が和史氏であったにもかかわらず、百濟王氏を「朕の外戚」と呼んだことである。諸蕃系氏族への賤視が一般的だった当時、あえて百濟王氏を外戚とすることには重大な意味があり、百濟系の血への傾斜の強さを物語っている。このような百濟王氏重視の傾向は、百濟王氏が日本古代国家にとって「百濟王権」を象徴する存在であったことと、桓武朝における時代的要請がリンクした結果つまり、桓武朝における百濟王氏の活躍は、中華帝国を志向していた桓武朝の「国際化」に淵源を持つものであった。こうした百濟王氏の台頭にもなう百濟系氏族の活躍ぶりが『靈異記』に反映されていると考えられ、同書での「百濟」の位置づけられかたが日本仏教界全体に波及していったといえるだろう。

そして第4章では、まず10世紀の『聖徳太子伝暦』において、やはり「百濟」は極めて重要な位置づけに置かれていることを明らかにした。太子信仰にとって、『伝暦』の成立は一つの大きな画期と考えられている。すなわち『伝暦』の内容は、後世の太子伝の基礎となるものであり、『伝暦』の成立をもって太子信仰の確立とみなされている。本書にみられる太子信仰の大きな特徴として挙げられるのが、太子と百濟人との密接な結びつきなのである。すなわち、ここに描かれる太子は、常に百濟人との関係が契機となってその聖性が示されている。そうした太子と「百濟」との関係の強調は、太子信仰を単に宗教的次元において基礎づけただけでなく、同時にその過程において、舶載の思想である仏教を日本独自の国家思想として転成せしめたのである。そして「百濟」は、文化的次元における朝鮮半島の優越性とそこから来る憧憬とを一身に吸収した觀念上の存在となったのである。太子が、その死後聖人化され、信仰の対象となったように、太子信仰の発展の過程においては、「百濟」の存在もまた、亡びた国であるがゆえにそのイメージは増幅され、やがて仏教的桃源郷としての記号となったともいえる。そして、こうした『伝暦』および太子信仰全体における「百濟」の意義は、これまでにみてきた『靈異記』の百濟觀に規定されていたと考えられるのである。聖徳太子は、皇太子として、また摂政として、推古朝の内政・外交・文化諸方面において力をふるった人物であった。この太子の偉大さを強調するあまり、後世、太子を極端なまでに超人化して描く傾向が強くなる。中国陳朝の高僧で

天台宗の第二祖である恵思の生まれ変わりであったとされたり、幼少の頃より人々に仏教を説き、未来をも予言したとされるなど、さまざまな神秘的な事績が語られた。こうした荒唐無稽ともとれる奇瑞譚や転生説は、時代が下るにつれてその種類も増し、内容も豊かになっていく。これは、説話の発展の一般的な傾向であるともいえるが、その展開のあり方は、時代ごとの要請に応えるものであった。古代から中世にかけての太子伝の展開も、時代が求めた太子像の集積の過程であった。やがてそうした太子伝が、平安中期の『聖徳太子伝暦』で集大成としてまとめられ、本書の成立を以て太子信仰の確立とみなされたのである。

仏教的世界観に基づくことによって〈中国からの自立〉を模索し、日本においてようやく国家意識が確立したのが9世紀であった。それゆえ、この時期の日本民族にとっては、自らの政治的・思想的源泉としての中国の存在をもっとも強く意識させられた時期でもあった。この時期の太子信仰にも、中国への強烈なまでの憧憬と対抗意識が表裏一体となって立ち現れている。言い換えれば、国家仏教のもとに組織された律令体制の独自性を、太子を媒介として強調するも、太子自身の仏教的優越性は結局中国仏教に裏打ちされる形でしか保障されえなかったのである。まさに日本にとっては、中国を頂点とする東アジア世界のなかで帝国の構造が実体を失い、観念的な次元でも帝国秩序の維持が危ぶまれた頃であった。このような時期に成立したのが『靈異記』であった。これと前後して成立した『新撰姓氏録』は、現実の東アジア世界において支配される諸蕃を失った段階で、諸蕃系諸民族集団の日本国内での包摂を明示することにより帝国の構造を維持・再確認する機能を担っていたが、『靈異記』において文化的に優越した民族集団・百済系氏族が「自土」内で日本仏教を支える重要な存在として描かれていたことは、同書が『新撰姓氏録』と同様の機能を果たしていたことを示している。『靈異記』下38までが編まれた桓武朝期に、先進技術・文化を武器に日本国内で多大な影響力を誇った百済系氏族も、天皇の外戚と称され、官人として登用されることによって、あたかも律令制下では「日本之神胤」と対等な立場に置かれているかのようにみえて、実は同時に政治的従属の対象である朝鮮半島の象徴でもあった。そうすると、百済人僧侶あるいは行基や道照などの百済系氏族出身の僧侶が高く評価されて描かれている『靈異記』は、一見すると『新撰姓氏録』とは異なる方向性を有しているかのようにみえる。しかし、『新撰姓氏録』成立の直後に追加された下39では、草木の一本にいたるまで、日本の国内にあるものはすべて天皇に帰属すると主張されている。すなわちこのような説話が追補されたことから、『靈異記』が、文化的に優越した民族集団・百済系氏族の自土への包摂を強調することで、実際の東アジア国際関係上は存在しない、日本を頂点とした帝国の秩序構造を、観念的次元において実現することを目的としていることが明らかなのである。このことは、とりもなおさず、〈中国からの自立〉という6世紀以来の日本にとっての課題を克服するための活路が「百済」という観念上の存在に見出されたことを表す。すなわち、『靈異記』において、「百済」という文化的・仏教的に優越した存在を政治的次元では「諸蕃」として従属させることによって、日本と中国文化・中国仏教との切り離しが仕組まれ、日本は文化的（仏教的）・政治的両側面における対等国として、中国からの独立を目指したのである。そうした自土意識を契機とした自立への試みの集大成が、10世紀の『伝暦』の成立であり、「古代的ナショナリズム」としての太子信仰の確立なのであった。

以上の如くの結論を導く本論文では、太子信仰が「古代的ナショナリズム」と称され、その構造的性質を明らかにすることが目的とされている。近代的概念でいわれるナショナリズムの語義をめぐって、いまひとつつこんだ議論が必要だとの意見が、審査委員から出され、従来のナショナリズムをめぐる議論をふまえておく必要があるとの指摘があった。

ナショナリズム、あるいはネイションという概念は、アーネスト・ゲルナーらによって「近代に固有な諸条件の産物」と規定されてきた。これに対してネイションとナショナリ

ズムを、何世代もの時間の経過の過程で結合し、形成以前よりずっと存在しつづけている伝統と遺産の産物であるとしたのが、アンソニー・スミスである。スミスは、「ナショナリズム」という言葉は、人間集団の自治・団結アイデンティティの形成と維持のためのイデオロギー的な運動を意味し、ナショナリズムによって現実的ないし潜在的な「ネイション」が生み出されるとする。さらに、「ネイション」という言葉は、「歴史的な領土、共通の神話と記憶をもつ大衆、公に認められた文化、統一された経済、構成員すべてに共通した権利と義務、これらを共有している人間集団」であると規定し、近代の政治的ナショナリズムは、昔からあったエスニックな歴史の記憶や、前近代的なエスニック・アイデンティティと共同体との関係を前提としない限りは理解され得ないと主張しているのである。本論文において明らかにされた太子信仰あるいは自主意識を「ナショナリズム」の所産と呼ぶためには、この言葉の性格をめぐる議論について、より深く吟味し、検討することが求められる。しかし、スミスが主張するように、ナショナリズムが「歴史的な継承性」を有しているという意味では、古代的な国家の有り様と、そこでの国家意識が、「ネイション」や「ナショナリズム」と呼ばれる状態へ連続しているとみることが可能であろうとの結論を得た。

全体として、日本人の思想を決定づけるともいえる、古代から中世に至る間の太子信仰を、はじめて対外意識との関係を通じて総括的に論じ、手堅くまとめた好論である。イデオロギーを扱いながら、聖徳太子・行基・聖明王・調子丸、そして顕真・慶政、あるいは景戒といった人物群像が、時代の要請のもとに、躍動するさまを描ききった。史料の緻密な検討に基づく論理の展開は、飛躍がなく、説得的で、博士号を授与するにふさわしい力作であると、審査委員の見解が一致した。